妊婦における
DOHaD説の理解度に関する調査研究：国際比較を目的とした質問票を用いて（中間報告）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 芽夢, 菊池, 百華, Dixon, Robyn, Wall, Clare, Bay, Jacquie, 小山田, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3303

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2017 年 第 6 巻 第 1 号　93 頁

妊婦における DOHaD 説の理解度に関する調査研究：国際比較を目的とした質問票を用いて（中間報告）

○高橋芽夢[1)]，菊池百華[1)]，Robyn Dixon[2)]，Clare Wall[3)]，Jacquie Bay[4)]，小山田正人[1)]

藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科[1)]，School of Nursing, University of Auckland[2)]，University of Auckland[3)]，Liggins Institute, University of Auckland[4)]

【目的】DOHaD 説の社会への普及とそれに関わる幅広いヘルスプロフェッショナルへの DOHaD 教育導入が望まれる。本研究は、ニュージーランド、オークランド大学 Liggins 研究所と藤女子大学との共同研究「DOHaD に関する理解についての国際比較プロジェクト」の一部である。対象を石狩市の妊婦とし、DOHaD についての質問票調査を行うことにより、社会への DOHaD 理論普及のための基礎資料を得ることを目的とする。
【方法】対象は、石狩市（人口約 59,000 人）の全妊婦（約 300 名/年）で、母子手帳を受取り時、質問票への回答を依頼し、郵送法により回収した。調査は 2016 年 6 月より開始し、現在も継続中である。質問票は、昨年の本学会で発表したように、「DOHaD に関する理解についての国際比較プロジェクト」で作成した 10 の英語質問文を日本語に翻訳したものを用いた。本研究は、藤女子大学倫理審査委員会の承認と石狩市の許可を得ている。
【結果】2016 年 6 月から 2017 年 3 月までに、34 人の妊婦より回答が得られ、回収率は 17.4%（この期間中の全妊婦数は 195 名）だった。
質問「母親が妊娠中に食べた食物は、子供の成人期全体にわたる健康に影響を及ぼし、生活習慣病の発症に関わる」に対して、「強くそう思う」と「そう思う」の回答がそれぞれ 5.9%と 26.5%だった。「子供が２歳までに食べた食物は、成人期全体にわたる健康に影響を及ぼし、生活習慣病の発症に関わる」に対し、「強くそう思う」と「そう思う」の回答はそれぞれ 14.7%と 26.5%だった。一方、「母親が妊娠中に食べた食物は、妊娠中の赤ちゃんの健康に影響を及ぼす」に対して、「強くそう思う」と「そう思う」の回答はそれぞれ 67.6%と 29.4%だった。
【結論】研究対象妊婦の DOHaD 説の理解度は不十分であると考えられる。